

『病期・病態・重症度からみた 疾患別看護過程＋病態関連図』

学生の不安を解消する、 ありそうでなかった ノウハウ満載のガイド

編集：井上智子・佐藤千史／定価：7,350 円（本体 7,000 円＋税 5%）

発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



この本を手にした学生の反応は、「実習のとき役に立ちそう！ いいなー」であった。実習ガイダンスの時点から学生の反応は、「眠れない・大変・緊張する～」となる。「何が大変？」と聞くと、患者さん、指導者さん、コミュニケーション……と大変の種は尽きない。実習に対して、座学とは違った楽しさを感じてはいるものの、先輩の情報から不安と睡眠不足の予測に恐々としている学生たちである。そんな学生が看護過程を学ぶとき、これまでの学びが、自分の判断を伴わない暗記で、テストをクリアしてきた連続であったということに気づく。患者の情報をどのようにアセスメントし、その根拠はということになると、はたと思考が停止してしまう。そして本に答えを求め、グループメンバーに意見を確認する。しかし最後は多くの情報を、自分の頭で分析しなくては答えが出ないということに気づき、愕然とする。

受け持ち患者の情報を受け取ったときに学生の取る行動は、図書館で疾患の勉強から取り掛かる。しかし単独の疾患・障害で入院している患者はほとんどいない。膨大な疾患の勉強をしなくてはならない。そして解剖・生理から始まって、検査データ、薬理学、治療、食事療法、画像診断の本、etc……、かくして学生のズブクロは、はちきれんばかりに膨らみ、看護の本にたどり着く頃は真夜中か、朝方か、最悪の場合は実習開始に突

入してしまうという状況である。

この本の何が良いか。厚いので持ち運びには決して便利とはいかないが、①必要な知識がまとまっている、②目で見える疾患——疾患の知識、③ステップを踏んで思考過程が明確になるように構成されている点——他書には見られない一番の特徴は、病期・病態・重症度ではないかと思いついた。

これまで学生は、疾患の勉強をしても、自分の受け持ち患者の病期・病態・重症度が判断できないことが多かった。そのために、どのような看護介入が今後必要になるかという判断がずれることが多かったように思う。「この患者さんの健康段階はどうかの？」と質問すると口頭では、ほぼ的確な答えが返ってくる。その人の健康状態が、自分の目で見えて確認できているからである。記録上表現できないのはなぜなのか疑問であったが、疾患の理解のみでは、重症度の判断に結びつけられないということがわかった。そうした点をおさえて指導することが大事と確認できた。さらに「具体的な処方例」も、これまでの参考書でありそうでなかった点である。受け持ち患者の処方内容をメモで書きとめていても、その意味を理解するまでの時間がかかりすぎていた現状がある。商品名から作用・副作用に行きつくまで時間が足りなかった。

これでばっちり『看護過程』、楽しい実習となる。